琉球大学学術リポジトリ

琉球宮古諸方言の音韻：琉球宮古方言の音声資料の収集・研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 狩俣繁久 公開日: 2009-02-25 キーワード (Ja): 琉球方言, 宮古諸方言, 平良方言, 音声資料 キーワード (En): RYUKYU DIALECTS, DIALECT OF MIYAKO ISLANDS, HIRARA DIALECT, DATA OF PHONETIC 作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8908

3．宮古諸方言の概観

3.1. 舌先母音について

宮古諸方言は、宮古島とその周辺離島（大神島、池間島、伊良部島、来間島）ではなされている方言で、宮古八重山方言群のなかにあってふるい姿をおおくのこしていて、保守的な傾向をもっている。

宮古諸方言はいずれの下位方言においても／o／→／u／，／e／→／i／という半ひろ母音の「せま母音化」と、／i／→／ɿ／という前舌せま母音の舌先母音化がおきているし、語頭の音節におけるつよい呼気によって第2音節目の流音や半母音が摩擦音化するという現象もおきている。つよい呼気による音韻変化は、宮古諸方言のいずれの下位の方言においても観察できるのである。そしてその後、方言によっては呼気がよわまり、それにともなう変化がおきている。呼気のつよさとそれにともなう変化のしかた、あるいは呼気のよわまりと、それにともなう変化のしかたのそれぞれに、方言ごとの差異があり、一様ではない。また、その変化のしかたは、フォネームの種類によってもちがうし、おなじフォネームでも他のフォネームとの結合の仕方や単語内での位置によっても微妙にちがうだろう。

前舌せま母音／i／は声道がせまく、音響管としての効率がわるく、十分な聞こえを保証するためにはよりつよめの呼気流をもって発音しなければならない。このせまい声道につよい呼気がながれて、前舌せま母音／i／が D. ジョーンズの基本母音の外側にでるほどにおしやられて、舌先母音／ɿ／となるのである。

平良方言をはじめとするおおくの宮古島諸方言の舌先母音／ɿ／には、語頭にたつか、語尾にくるかという単語内での位置のちがい、結合するフォネームのちがいによっていくつかのアロフォンがある。

①無声の破裂音と結合するとき〔k^{s}ɿ〕〔p^{s}ɿ〕のように子音の出わたり＝母音の入りわたりに〔s〕のような摩擦音がきかれる。

〔k^{s}ɿmu〕肝、〔p^{s}ɿsara〕平良（地名）

②有声の破裂音と結合するとき〔g^{z}ɿ〕〔b^{z}ɿ〕のように子音の出わたり＝母音の入りわたりに〔z〕のような摩擦音がきかれる。

〔g^{z}ɿ：pa〕かんざし、〔b^{z}ɿ：〕坐る、〔ɟg^{z}ɿ〕釘

③他の子音と結合せず単独で発音されるとき、とりわけ語頭にあらわれるときには〔ᶻɹ〕のような摩擦音をともなうアロフォンであらわれる。

〔ᶻɹ：〕飯、〔ᶻɹ：ʃa〕唖者

④語末では呼気がよわくなるのにともなってその摩擦もよわくなる。

〔tuɹ〕鳥、〔makaɹ〕碗

ただし、規範的な丁寧な発音のときには、語末でも摩擦がきかれる。このアロフォンが動詞や形容詞の語尾にあらわれるとき、方言によっては摩擦がよわくなるだけでなく、舌先母音そのものがなくなってしまうことがある。

	高かった	飲んでいる
平良市西里方言	takakataɹ	numju：ɹ
城辺町保良方言	takakata：	numju：

舌先母音／ɹ／は、無声破裂音の／p／／k／と結合するときに摩擦がもっともつよくなり、有声破裂音の／b／／g／と結合するときに、わずかに摩擦がよわくなる。とくに、無声子音にはさまれて、舌先母音／ɹ／が無声音化したばあい、その呼気流量はよりおおくなるようである。これは無声音のばあい、声門が開放され、有声音よりも呼気流量がおおくなるからであろう。逆に、有声子音のばあい、かるく閉じられた声門が肺からの呼気流によっておしひらかれるが、とおりぬける呼気流に対して声門が内側にひっぱられて閉じるという開閉運動によって声帯が振動して声がつくられる。もし、肺からおくられる呼気流量がおなじで、その持続時間もおなじであれば、有声子音は無声子音よりも声道内の呼気圧はわずかだがひくくなるだろう。その有声子音と結合した舌先母音／ɹ／は、無声子音と結合したそれよりも摩擦もよわくなるはずである。

他のフォネームとの結合の条件がおなじばあい、語頭にきたとき、もっとも摩擦音がつよくなり、語尾にきたとき摩擦音がよわくなる。上記③はその典型的なばあいだが、③〔ᶻɹ：〕（飯）、②の〔bᶻɹ：〕（坐る）は語末にいくほど摩擦がよわくなっていくし、〔fgᶻɹ〕（釘）には〔fgɹ〕のように摩擦のよわいバリアントがしばしばみられる。

（注）上記の①②では子音からの出わたりに摩擦音がきこえるというよりも、舌先母音／ɿ／は、平良方言の摩擦音〔s〕〔z〕とおなじ調音点でつくられる母音であって、つよい呼気による「おしやり」のために、摩擦音〔z〕や〔s〕とおなじ調音点、調音方法をもつにいたるのである。ロシアの言語学者で、大正年間に宮古方言を調査したニコライ・ネフスキーは、この舌先母音／ɿ／を〔pstu〕人、〔zzu〕魚、のように表記したし、柴田武1972は他の子音と結合せず、単独であらわれるばあいの摩擦のつよいこの音声を成節的な子音／z／とみなして、〔z'u〕魚、〔tuz〕鳥などのように表記した。ネフスキーや柴田の表記は、この舌先母音が調音的には子音的な側面をもっていることをしめしている。ネフスキー以来の宮古諸方言の音声に関する研究史については、かりまた1984「宮古方言のフォネームはいかに記述されてきたか」にくわしい。

舌先母音／ɿ／は、鼻音／m／／n／とは結合しにくく、一般的には〔mi〕〔ni〕となるか、母音が消失して成節的な子音〔m̩〕〔n̩〕となる。この成節的子音〔m̩〕〔n̩〕は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも自由にあらわれる。

口蓋帆がたれさがり、呼気が鼻むろへぬけ、鼻むろでの共鳴をともって発音されるのが鼻音である。呼気が鼻むろへぬけ、口むろの呼気圧はあまりたかくならない。そのため、全体的に呼気のつよまった時期に、一時的には〔m^{z}ɿ〕のようになったが、先にのべたような理由で舌先母音／ɿ／が／i／にもどったり、母音がよわまって成節的な子音〔m̩〕になったりしたのであろう。

以下にしめしたように、形のうえからは「実」に対応し、「みそ汁の具」を意味する単語は、鼻音／m／と舌先母音／ɿ／が結合するまれな例だが、これはこの単語が1音節語で、しかも、母音がなが母音であったためであろうとかんがえられる。

*mi： → *m^{z}ɿ： → mɿ：　下地町上地・嘉手苅、伊良部町佐和田など
　　→ mi^{z}ɿ　平良市西里、城辺町保良、上野村宮国など

奥舌せま母音／u／も、前舌せま母音／i／と同様に、声道がせまく、音響管としての効率がわるく、十分な聞こえを得るためには、よりつよい呼気が必要となる。奥舌せま母音／u／のばあいは、前舌せま母音／i／に比較して、母音そのものの音価にはおおきな変化がおこっておらず、その前後の子音に影響をあたえて、前後の子音を変化させたようである。

せまい声道をながれるつよい呼気は、奥舌せま母音／u／に先行する両唇の破裂音／p／／b／を唇歯の摩擦音／f／／v／に変化させる。これはつよい呼気によって唇での閉鎖がいったんはおしひらかれるのであるが、そのつよい呼気に対する反作用としての「ふんばり」が下唇と上の歯のあいだにおこるのである。すなわち、つよい呼気を十分にうけとめるために、下唇の内側と上の門歯とで閉鎖をつくって、〔ɸ〕〔ɣ〕となったのであろう。

*pu→ɸ　〔ɸni〕舟、〔ɸtaːtsɹ〕二つ、〔toːɸ〕豆腐
*bu→ɣ　〔kiɣʂ〕煙・首里方言kibuʃi、〔kaɣʂ〕被せる
〔paɣ〕蛇・首里方言habuに対応、〔kuɣ〕昆布

つよい呼気は、奥舌せま母音／u／に先行する奥舌軟口蓋の破裂音／k／／g／を摩擦音／f／〔ɸ〕、／v／〔ɣ〕に変化させた。これもせまい声道をつよい呼気がながれることによって奥舌と軟口蓋の閉鎖がおしひらかれ、同時に下唇の内側と上の門歯とでふんばりがおこり、摩擦音〔ɸ〕〔ɣ〕になったものであろう。奥舌軟口蓋の破裂音／k／／g／が、両唇破裂音／p／／b／とおなじように、唇歯の摩擦音に変化したのは、両者は閉鎖の位置がことなってはいるが、円唇の奥舌せま母音／u／と結合した音節を形成することによって音響管としての声道の形がちかくなり、結果として同様の変化がおきたとかんがえられる。

*ku→ɸ　〔ɸmu〕雲、〔iɸsa〕戦
*gu→ɣ　〔doːɣ〕道具

この／f／／v／は後続する流音／r／に影響を与えて唇歯の摩擦音／ɸ／／v／に変化させる。

〔ɸfu〕黒、〔ɸfakaɹ〕暗い
〔aɣva〕油、〔aɣvi〕炙れ

単独で語頭にたつ〔u〕が〔ɣ〕に変化することがある。

〔ɣː〕売る、〔ɣvi〕売れ

〔γｖａ〕お前（参考：与論方言〔ʔｕｒａ〕）など。

〔γ〕は〔ｆ〕にくらべて、摩擦がいくぶんよわく、不安定であるが、〔ａγｖａ〕（油）、〔γｖａ〕（お前）のように後続する音節をひらく子音〔ｖ〕と連続するとき、この子音の摩擦はもっともつよくなる。語末では呼気がよわまるので、摩擦がなくなって奥舌せま母音／ｕ／になってしまうことがあるし、語末でなくても成節的な子音として単独で語中にあらわれるばあい（〔ｋｉγｓ〕煙、〔ｊａｔｓɹγｓａ〕蓬（灸草に対応）など）も〔ｕ〕に変化しやすい。蛇を意味する単語はつぎのようないくつかのバリアントがあり、語末の〔γ〕の摩擦が弱まって〔υ〕になり、さらに円唇の奥舌狭母音〔ｕ〕を経て、さらに、直前の母音と融合する過程がわかる。

ｐａγ（平良市西里）→ｐａυ（城辺町砂川）→ｐａｕ（平良市池間）→ｐｏ：（多良間村塩川）

注）　宮古諸方言では／ｗ／→／ｂ／の変化があるので、半母音／ｗ／が原則的にはみられないはずだが、実際には少数の単語に／ｗ／があるという報告がある。これらの単語の／ｗ／は、首里方言では／ʔｗ／であらわれる。

／ｗａ：／豚、
／ｗａ：ｔｓɹｋɹ／天気、
／ｗａ：ｇｕ／上
／ｗａ：ｎａɹ／嫉妬

私も宮古諸方言を調査しはじめた頃は、これらの単語を／ｗ／で表記していた。しかし、これらの単語の発音を注意ぶかく観察してみると、わずかだが下あごをひき、上唇の裏がわに下の歯がかるくふれたまま調音する。このようすは正面から観察するよりも横から観察する方がよくわかる。まだ、宮古諸方言を全面的に調査したわけではないが、地域によって、あるいは個人によって／ｖ／→／ｗ／の変化が進行していて、差があるようである。この／ｖ／→／ｗ　2
の変化は、標準語の影響によるものなのか、方言内の自律的な要因による変化なのかは不明である。

3.2. 成節的な子音

宮古諸方言には単独で音節をつくることのできる子音（成節的な子音）がよく発達している。宮古諸方言において成節的な子音になることができるのは、摩擦音〔ɸ〕〔ɣ〕〔ʂ〕、鼻音〔m̩〕〔n̩〕、流音〔l̩〕である。ただし、〔l̩〕は伊良部島の佐和田、長浜のふたつの集落にあらわれ、他の宮古諸方言にはみられない。また、多良間島の塩川、仲筋にもこの成節的なそり舌の側面音〔ɭ〕がある。

【表6】	神	蟹	道具	虫	鳥
平良市西里	kam̩	kan̩	do:ɣ	muʂ	tu^{z}ɹ
平良市大神	kam̩	kan̩	tayɣ	muʂ	tuɹ
平良市池間	kaɴ	kaɴ	do:ɣ	muʂ	tui
城辺町保良	kam̩	kan̩	da:ɣ	muʂ	tu^{z}ɹ
上野村	kam̩	kan̩	do:ɣ	muʂ	tu^{z}ɹ
下地町	kam̩	kan̩	do:ɣ	muʂ	tu^{z}ɹ
伊良部町長浜	kam̩	kan̩	do:ɣ	muʂ	tuɭ
多良間村塩川	kam̩	kan̩	do:ɣ	muʂ	tuɭ

いずれの成節的な子音もせま母音／i／／u／が消失することによってできたものである。

(a)ku・pu→ɸ　〔ɸmu〕雲、〔iɸsa〕戦、〔ɸni〕船
(b)gu・bu→ɣ　〔do:ɣ〕道具、〔aɣva〕油、〔kuɣ〕昆布
(c)si・su→ʂ　〔ʂta〕下、〔muʂ〕虫、〔uʂ〕臼
(d)mi・mu→m̩　〔kam̩〕神、〔m̩ni〕胸
(e)ni・nu→n̩　〔kan̩〕蟹、〔in̩〕犬
(f)ri・ru→l̩　〔tul̩〕鳥、〔pil̩〕にんにくの古語「蒜」に対応
((a)〜(e)の用例は平良市西里、(f)の用例は伊良部町長浜)

奄美大島南部方言でもせま母音〔i〕〔u〕が脱落して母音と結合せずにあらわれる子音があるが、奄美大島南部方言のばあい、語中や語尾にしかあらわれず、つねに閉音節（CVC）構造の単語しか形成しないのに対して、宮古諸方言にみられる成節

的な子音は、単語の語頭、語中、語尾のいずれの位置にも自由にくることができる。奄美大島南部方言のばあい、音節末の子音の独立性がよわく、閉音節（ＣＶＣ）が１音節なのに対して、宮古諸方言のばあい、音節をとじる位置にあらわれる子音でもその子音の独立性は相対的につよく、同じＣＶＣでも２音節とみるべきだろう。

奄美大島南部方言のばあい、鼻音／ｍ／／ｎ／、流音／ｒ／のひびき音(sonants)だけでなく、破裂音／ｐ／／ｔ／／ｋ／、破擦音／ｃ／〔tʃ〕、摩擦音／ｓ／のようなさまたげ音(obstruents)も音節をとじる位置にくることができる。それに対して、宮古諸方言のばあい、成節的な子音になることができるのは、鼻音／ｍ／／ｎ／、流音／ｒ／と摩擦音／ｓ／／ｆ／／ｖ／であって、破裂音、破擦音は成節的な子音になることができない。宮古諸方言で成節的な子音になることができる子音はいずれも継続音であって、非継続音は成節的な子音になることができないのである。

語頭　〔ṃｔａ〕土、〔ṃｔｓɿ〕道、〔ḟｆａ〕子、〔ɣｄａ〕太い
語中　〔ａｋａṃｔａ〕赤土、〔ｋｉɣṣ〕煙
語尾　〔ｋａṃ〕神、〔ｎｕṃ〕蚤、〔ｔｉɣ〕投げる、〔ｋｉḟ〕湯気
（用例はいずれも保良方言）

宮古諸方言の名詞は、格やとりたてのくっつき（助辞（が融合して、曲用のしかたが特徴的だが、名詞の語末に成節的な子音がくるばあい、その名詞に格助辞ｊｕのついた形（標準語のを格に対応する）、および、とりたて助辞ｊａのついた形（標準語の「は」のとりたての形に対応）は、語末の子音（成節的な子音）がかさなってあらわれる。これは宮古諸方言に特徴的にみられる現象である。

【表７】

はだか格	格助辞 -ｊｕ	とりたて助辞 -ｊａ
①ｋａṃ（神）	ｋａṃｍｕ	ｋａṃｍａ
②ｋａṇ（蟹）	ｋａṇｎｕ	ｋａṇｎａ
③ｍｕṣ（虫）	ｍｕṣｓｕ	ｍｕṣｓａ
④ｔｏːḟ（豆腐）	ｔｏːḟｆｕ	ｔｏːḟｆａ
⑤ｋｕɣ（昆布）	ｋｕɣｖｕ	ｋｕɣｖａ
⑥ṃｓｕ（味噌）	ṃｓｕː	ṃｓｏː
⑦ｍａｍｉ（豆）	ｍａｍｊｕː	ｍａｍｊａː
⑧ｆｓａ（草）	ｆｓｏː	ｆｓａː

⑨ｆｇ^{z}ɿ（釘）　　ｆｇ^{z}ɿｚｕ　　ｆｇ^{z}ɿｚａ
⑩ｉｋ^{s}ɿ（息）　　ｉｋ^{s}ɿｓｕ　　ｉｋ^{s}ɿｓａ
⑪ｍａ^{z}ɿ（米）　　ｍａ^{z}ɿｚｕ　　ｍａ^{z}ɿｚａ

うえにあげた成節的な子音は、単独で１モーラの音節を形成するものであるが、宮古諸方言には、子音それのみで２モーラにかぞえられ、単独で単語になることのできる「なが子音」がある。このなが子音も鼻音、摩擦音であって、いずれも継続音である。

〔ɸ：〕櫛（大神島方言）
〔γ：〕売る（平良方言など）
〔ʂ：〕巣（大神島方言）
〔ɱ：〕甘薯（平良方言など）
〔ɲ：〕うん〔応答〕（平良方言など

このなが子音は、つぎのようにみじか子音と対立するものである。

ｆｆａ　子　　ɱｍａ　祖母　　ʂｓｕ　白
ɸ：ｆａ　櫛は　　ɱ：ｍａ　芋は　　ʂ：ｓｕ　巣は
（用例はいずれも大神島方言）

この成節的な子音のなかには、べつの子音と結合しながら、音節主音的な子音となることのできるものがある。

①〔ɱｔｔａ〕道は、〔ɸｔtsａ〕鯨（いずれも城辺町保良方言）
②〔ｋɸ：〕作る（大神方言）
③〔ｂɭ：ｂɭ：ｇａｓｓａ〕くわずいも（伊良部方言）

①の〔ɱｔｔａ〕は〔ɱｔ〕〔ｔａ〕のふたつの音節にくぎることができる。第１音節目では唇をとじた状態〔ɱ〕からそのまま舌先の閉鎖〔ｔ〕へと移行するが、その〔ɱ〕が標準語の「言った」〔ｉｔｔａ〕の第１音節目の母音〔ｉ〕とおなじように、音節主音として機能しているのである。〔ɸｔtsａ〕も〔ɸｔ〕〔tsａ〕のふた

つの音節に区切られる。第1音節目では〔f̬〕における唇歯の摩擦の調音からそのまま舌先での閉鎖に移行して音節がとじられる。そして、舌先の破擦音から母音〔a〕で開放されるのである。

また、大神島方言の〔kf̬:〕（作る）は、語頭の子音〔k〕の調音（軟口蓋での閉鎖）に際して、摩擦音〔f̬〕のための下唇の裏側と上の歯とのかるい接触が同時に用意されていて、軟口蓋での破裂に際して流出した呼気で唇歯の摩擦音〔f̬〕が生成されるのである。この〔f̬:〕は、2モーラのながさをもつ、なが子音で、なが母音フォネームとおなじように、音節主音として機能していて、音節主音的な子音(syllabic consonant)とよぶべきものである。

③の〔bl̩:bl̩:gassa〕は、〔bl̩:〕〔bl̩:〕〔gas〕〔sa〕のよっつの音節に区切られ、最初の音節〔bl̩:〕の発音の〔b〕の調音に際して、両唇の閉鎖と同時に舌先がすこしそりかえった状態で硬口蓋に接触していて、両唇での破裂のときに流出した呼気でそり舌の側面音〔l̩:〕が生成される。この〔l̩:〕も2モーラのなが子音で、なが母音フォネームとおなじように、音節主音として機能している。

舌先母音／ɿ／〔ᶻɿ〕～〔ˢɿ〕も、調音のしかたは、摩擦音〔s〕〔z〕とおなじであって、実質的には子音〔ʂ〕〔ʐ〕が母音の役割をはたしているともみることができるものである。そのとき摩擦音〔ʂ〕〔ʐ〕が音節主音的に機能しているとみなすことも可能だろう。そのことは【表8】にみる名詞の曲用のしかたにもあらわれている。【表7】の⑨〔fgᶻɿ〕、⑩〔ikˢɿ〕、⑪〔maᶻɿ〕をそれぞれ〔fgʐ〕〔ikʂ〕〔maʐ〕とみると、成節的な子音〔ʂ〕〔ʐ〕とおなじ曲用をするとかんがえることができるのである。

【表8】はだか格	格助辞 -ju	とりたて助辞 -ja
maʐ（米）	maʐzu	maʐza
fgʐ（釘）	fgʐzu	fgʐza
kabʐ（紙）	kabʐzu	kabʐza
ikʂ（息）	ikʂsu	ikʂsa
naʂpʂ（茄子）	naʂpʂsu	naʂpʂsa

いずれにせよ、舌先母音／ɿ／〔ᶻɿ〕〔ˢɿ〕は、摩擦音／s／／z／の調音と基本的にはおなじであり、成節的な子音としてふるまうが、他の子音フォネームと結合し

て音節主音的な子音になり、母音としてふるまう。母音としての性格と子音としての性格をあわせもつものである。舌先母音／ɿ／の子音的な特徴は宮古諸方言のなかでも差があるが、全体として摩擦音がよわくなり、子音的な性格がうすまって、母音的な性格がつよまっていく傾向があるようである。

注）成節的な子音〔f̩〕〔s̩〕をみとめず、〔fu̯〕〔sɿ〕のように無声化した母音をおぎない、音韻論的には／fu／／sɿ／とするかんがえがある。たとえば、〔f̩sa〕（草）を〔fu̯sa〕と解釈するものである。しかし、語頭の〔f̩〕から〔sa〕に移行するとき、宮古諸方言の奥舌せま母音特有の唇のまるめはまったく観察されず、母音〔u〕をみとめることはできない。そして、語末に母音〔u〕がくる名詞の曲用と、語末に成節的な子音がくる名詞の曲用のちがいを説明することもできない。

〔taku〕	蛸	〔takoː〕	蛸は
〔toːf̩〕	豆腐	〔toːf̩fa〕	豆腐は
〔kuɣ〕	昆布	〔kuɣva〕	昆布は

3.3. 宮古諸方言の下位区分

宮古諸方言の下位区分についての定説はまだないといってよいだろう。いくつかの試みがあるが、まだ、定説にはなりえていない。多良間島方言の位置づけについてはすでにのべたように、八重山諸方言の下位方言とみなすべきである。大神島と池間島の方言がやや孤立的である。また、伊良部島の方言も宮古島（ここでは以下「宮古本島」とよぶ）とことなる特徴を有していて、独立した下位方言とみなすべきであろう。来間島の方言は、これまでの調査報告などから、隣接する下地町の方言とのおおきなちがいをみいだせないので、とくに、独立した下位方言とみなすほどではないとおもわれる。

問題は、宮古本島の方言を、さらに下位区分するかどうかであろう。下地町の方言が語彙論的に、また形容詞の活用などに独特のものがみられ、その他の方言から区分できそうだし、狩俣、島尻などの北の方の方言もやや特徴的な現象がみられる。二重母音の融合、標準語の「キ」「ギ」に対応する音節の破擦音化の有無などによって、

平良を中心にする中央方言と周辺方言とに区分することも可能だが、その明確な境界線をひくことはできない。

【表9】	竿	麹	米	前
伊良部町長浜	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
平良市池間島	sau	kaudzɹ	mai	mai
平良市大神島	sau	kaukɹ	maɹ	mai
平良市狩俣	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai
平良市島尻	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
平良市西里	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai
城辺町新城	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
城辺町保良	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
城辺町友利	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
上野村新里	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
上野村宮国	sau	kaudzɹ	ma^{z}ɹ	mai
上野村野原	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai
下地町与那覇	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai
下地町嘉手苅	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai
下地町来間島	so:	ko:dzɹ	ma^{z}ɹ	mai

二重母音／ａｏ／／ａｕ／が融合しないのは、北の方の池間島、大神島、伊良部島長浜、平良市島尻、そして南の方の城辺町保良、新城、友利、上野村新里、宮国などである。二重母音／ａｉ／／ａｅ／は、宮古全域で融合していない。

また、つぎの【表10】にしめしているように、標準語の／ｋｉ／／ｇｉ／に対応する平良方言などの／ｋ^{s}ɹ／／ｇ^{z}ɹ／が城辺町保良方言などで／ｃɹ／〔tsɹ〕、／ｚɹ／〔dzɹ〕に変化している。これは phonematic な条件による破擦音化の現象であろう。標準語の／ｋｉ／／ｇｉ／に対応する沖縄本島諸方言の音節が同じく破擦音化して／ｃｉ／〔tʃi〕、／ｚｉ／〔dʒi〕になっているのとおなじ現象である。この破擦音化の現象も、北の伊良部島長浜、池間島、南の城辺町保良などの方言にみられる。弱変化動詞の否定の形が、／ｕｋｉｎ／となるか、／ｕｋｕｎ／になるかという分布も、二重母音の融合や破擦音化などといくらかかさなるものの、明確な境界線をひけるほどかさなっているわけではない。

【表10】	肝	釘	起きない
伊良部町長浜	tsɹmu	ʃdzɹ	ukiɲ
平良市池間島	tsɹmu	ʃdzɹ	ukiɲ
平良市大神島	kɹmu	ʃkɹ	ukiɲ
平良市狩俣	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukiɲ
平良市島尻	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukiɲ
平良市西里	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukiɲ
城辺町新城	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
城辺町保良	tsɹmu	ʃdzɹ	ukuɲ
城辺町友利	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
上野村新里	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
上野村宮国	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
上野村野原	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukiɲ
下地町与那覇	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
下地町嘉手苅	k^{s}ɹmu	ʃg^{z}ɹ	ukuɲ
下地町来間島	tsɹmu	ʃdzɹ	ukuɲ

沖縄言語研究センターが1983年におこなった言語地理学的な調査の報告がまだでていないので、現段階では宮古本島の方言の下位区分は保留しておくことにする。

宮古島方言については、次の章で平良方言の音韻について詳しく論述するので、ここでは他の下位方言について紹介することにしよう。

注）宮古本島方言の下位区分をこころみたものとしては、崎山理1963がある。崎山理1963では、宮古諸島の２０数地点を調査した結果、その音韻的な特徴にしたがって、宮古諸方言を、⑴宮古島北部、⑵宮古島中部、⑶宮古島南部、⑷多良間、⑸水納、⑹来間、⑺大神、⑻池間、⑼伊良部のここのつの下位方言に区分している。崎山理1963は、いま読み返してもなお示唆的な論文であり、下位区分についてもおおいに参考になるものであるが、「宮古島南部」から城辺町保良、新城をはずし、来間方言に分類していること、来間方言を下地町の方言から独立させていることなど、いくつか検討を要すべき点もある。

注）来間島は、宮古島の南西１．６キロメートルに浮かぶ、周囲２．８平方キロメートル、人口約１７０人の島である。南に向かってゆるく傾斜した平らな島ではサトウキビを中心にした農業が営まれている。現在は、宮古島とのあいだに来間大橋がかけられている。

注）中本正智1976は、／ｏ／→／ｕ／、／ｅ／→／ｉ／のせま母音化の原因を機能論的な観点から、すなわち、二重母音／ａｕ／／ａｏ／や／ａｅ／／ａｉ／が融合することによって、／ｏ：／がおしやられて、／ｕ：／に変化し、／ｅ：／がおしやられて、／ｉ：／に変化したとかんがえるのである。中本正智1976は、次のように説明している。

この３母音化への変化が円滑に実現される状況を醸成したのは、連母音の融合（／ａｕ／／ａｏ／筆者による補い）によって／ɔ：／が発生して、／ｏ／の周辺に音声上の類似母音が増加したことにあると考えられる。また、これと並行して、前舌においても、／ｅ／の周辺に，連母音（／ａｉ／／ａｅ／筆者補い）の融合によって生じた類似母音の／ε：／が増加している。

それに対して、加治工真市1977は、宮古諸方言には上記のような連母音の融合が起こっていないにもかかわらず／ｏ／→／ｕ／、／ｅ／→／ｉ／の変化が起こった方言があることを指摘して異論を唱え、以後支持される定説もないままであった。

うえの【表９】にしめしたように、宮古諸方言の二重母音の／ａｅ／／ａｉ／は、全域でまったく融合しておらず、／ａｏ／／ａｕ／も周辺地域に融合していないところがある。二重母音が融合していないこれらの地域でも、みじか母音の／ｏ／／ｅ／は、せま母音化して／ｕ／／ｉ／に変化している。これは加治工真市1977の指摘したとおりである。

音韻変化の要因について考察するとき、機能論的な観点に目をむけることも重要ではあろうが、音声が音声器官の運動、すなわち、諸筋肉のダイナミックな運動と音声器官をながれる空気のながれによって生成されるものである以上、音韻変化の要因もそれらの相互作用を第一義に考慮しなければならないだろう。

3.4. 大神島方言

大神島は、宮古島の北部、島尻漁港から4キロメートルにうかぶ0.27平方キロメートルのちいさな島である。標高74メートルの円錐形の島で、平地がすくない。人口100人足らずのこの島の民俗行事「祖神祭」は島外の人々には見ることがゆるされておらず、神秘の島としてしられている。

大神島方言は、フォネームとしての有声破裂音／b，d，g／を有しない、琉球諸方言中はもちろん、日本語諸方言のなかでも唯一の方言である。この方言で調音点をおなじくする有声子音と無声子音の対立をもつのは、唇歯の摩擦音の／f／と／v／だけである。大神島方言のばあいも、／f／は／ku／／pu／が変化したもので、／v／は、／gu／／bu／が変化したものである。このことから、破裂音においてはじめから有声音が存在しなかったのではなく、なんらかの原因で有声破裂音が無声破裂音に変化したことがわかる。

①〔pana〕花、〔puni〕骨、〔upukaɱ〕大きい
②〔pasa〕芭蕉（植物名）、〔napi〕鍋
③〔tapaɳ〕茶碗、〔putu〕夫、〔pupa〕伯母

①は標準語のハ行子音の／h／に、②はバ行子音の／b／に、③はワ行子音の／w／のそれぞれに対応して大神島方言の／p／があらわれる語例であるが、これでみると、／w／→／b／という変化が先行し、そののちに／b／→／p／という変化が起きていることがわかる。つぎの語例は、本来の／t／／g／（④⑥）に、標準語のダ行子音／d／／g／が変化してできた／t／／k／（⑤⑦）の語例である。

④〔tura〕寅、〔utu〕音、〔ti:〕手、〔sata〕砂糖
⑤〔tuku〕毒、〔nutu〕喉、〔uti〕腕、〔juta〕枝
⑥〔kˢɹka〕柄、〔saki〕酒、〔taka〕鷹、〔muku〕婿
⑦〔mukɹ〕麦、〔kaki〕影、〔kakaɱ〕鏡

それでは、大神島方言の有声破裂音の無声子音化はいかにしてひきおこされたのであろうか。波照間島方言の〔p'ąɳa〕花、〔p'ąɱa〕浜などにみられる鼻音や流音の無声子音化のように、つよい呼気による変化だとみることもできる。しかし、そ

れだと、先行する子音が無声子音で、母音が無声化したばあいに限定され、無声子音化するのは破裂音にかぎらず、鼻音、流音などのすべての有声子音においても同様におこらなければならない。

一方、大神島方言で無声子音化するのは、有声破裂音に限定され、語頭、語中、いずれの位置でも、そして、後続する、あるいは、先行する母音の無声化とは関係なく無声子音化がおきている。それらのことからみて、この有声破裂音の無声子音化の現象は、つぎのようにおこったのではないだろう。有声破裂音のばあい、調音点（／b／なら両唇、／d／なら舌先と硬口蓋、／g／なら奥舌と軟口蓋）での破裂（あるいは開放）にさきだって、あるいは同時に、口むろの呼気圧よりも声帯によってとじられた声門下の圧力がたかく、その気圧の差によって声帯が振動するのであるが、肺からおくられる呼気がよわくなれば、声帯の振動がおくれて半有声の破裂音〔d̥〕〔g̊〕となり、さらに呼気がよわくなれば、無声音になってしまうのである。（この有声の破裂音が半有声音化する傾向は、他の宮古諸方言においても観察することができる。これは、筆者の学生時代に方言学の講義で仲宗根政善先生がすでに指摘されたことである。）

大神島方言の呼気のよわまりはこの方言の舌先母音／ɿ／を観察すれば、すぐに分かることである。すなわち、この舌先母音／ɿ／は呼気が弱よわく、摩擦のほとんどないバリアント〔ɿ〕であらわれる。

しかし、大神島方言でも無声化した舌先母音にかぎって摩擦音をともなうバリアント〔ˢɿ〕があらわれたり、舌先母音／ɿ／や奥舌狭母音／u／に後続する子音、とくに流音が摩擦音化する現象がみられ、大神島方言にも呼気のつよかった時期のあったことが容易に推測できる。

【表11】	大神方言	保良方言	平良方言
魚	ɿ ɷ	ᶻɿ z u	ᶻɿ z u
鎌	ɿ a r a	ᶻɿ z a r a	ᶻɿ z a r a
肝	k ɿ m u	ts ɿ m u	kˢɿ m u
左	p ɿ t a ɿ	pˢɿ d a ɿ	pˢɿ d aᶻɿ
柄	kˢɿ k a	ts ɿ k a	ts ɿ k a
人	pˢɿ t u	pˢɿ t u	pˢɿ t u
白	ṣ s u	ṣ s u	ṣ s u
黒	ḟ f u	ḟ f u	ḟ f u

大神島方言には、破擦音がみられないのであるが、これも呼気のよわまりにともなって破擦音が破裂音化したものとおもわれる。

【表12】	大神島方言	保良方言	平良方言
門	tau	dau	dʒo：
尻尾	tu：	du：	dzu：
風	kati	kadʒi	kadʒi
急須	tu：ka	tʃu：ka	tʃu：ka
茶	ta：	tʃa：	tʃa：
爪	kɹmi	tsɹmi	tsɹmi

上村1989は、破擦音の破裂音化を「琉球列島における「つ」「ず」「づ」に対応する音節にみられるこれらの音韻変化は気流のよわまりによって摩擦音がよわめられ、なくなることによっておこったものであって、子音が破擦音から破裂音へと変化したのであり、その逆ではない」と説明している。城辺町保良の方言も、他の宮古本島の諸方言にくらべると、わずかだが、呼気のよわい方言で、語末の／ɹ／がなくなることがある。保良方言でも、有声の破擦音にかぎって、破裂音化がおきているが、大神島方言の破裂音化は、有声、無声にかぎらず破擦音化がおきている。大神島方言の破擦音の破裂音化も呼気のよわまりが原因であることはうたがいない。

以上のように、大神島方言に特徴的にみられる音韻変化のおおくが呼気のよわまりによって生じていることがわかる。

3.5. 池間島方言

池間島は、宮古島の北1.4キロメートルに位置する、面積2.8平方キロメートルの馬蹄形の島である。池間島方言は、この島の池間、前里の2集落だけでなく、この島から移住した人々によってつくられた伊良部島の前里添、池間添（ふたつの集落をあわせて佐良浜ともよんでいる）、宮古島の北部、平良市西原ではなされている方言も池間島方言に属する。

標準語のハ行子音／h／に対応する池間島方言の子音は、／h／であり、他の宮古諸方言が／p／であるのと、おおきくことなる。これは他の宮古諸方言には見られな

い池間島方言の特徴である。

【表13】	花	針	骨	髭
平良市池間	hana	hjai	huni	higi
平良市西里	pana	pi^{z}ɿ	puni	p^{s}ɿgi
城辺町保良	pana	pjaɿ	puni	p^{s}ɿgi
平良市大神	pana	pæɿ	puni	pɿgi
伊良部町長浜	pana	paɻ	puni	p^{s}ɿgi

ただし、池間島方言でも、かつては〔pana〕〔puni〕のように発音していたことはあきらかであるが、／p／→／h／の変化の途中に中間的な／f／あるいは／Φ／の段階をもたなかったようにおもわれる。

池間島方言でも／u／と結合した／k／／p／は唇歯の摩擦音／f／に変化しており、奥舌せま母音／u／もつよい呼気による影響をうけていたことがうかがえるし、後続の流音を摩擦音に変化させている。

〔fkuru〕袋、〔fni〕舟、〔ffan〕降らない、〔fts ɿ〕口
〔ffakai〕暗い、〔ffu〕黒、〔mafa〕枕

池間島方言には、破擦音／c／〔ts〕、／z／〔dz〕や摩擦音／s／と結合するばあいをのぞくと、舌先母音／ɿ／は前舌せま母音／i／に変化している。これは他の宮古諸方言にはみられない池間島方言の特徴である。この舌先母音の前舌母音化と、先にのべたh音化とは、ほぼ同時におきたものと思われる。（ただし与那国島方言では完全に／i／に移行しているし、八重山方言のいくつかの下位方言にもみられる現象である。）

【表14】	池間島	平良市西里	城辺町保良
人	hitu	p^{s}ɿtu	p^{s}ɿtu
鳥	tui	tuɿ	tuɿ
海老	ibi	ib^{z}ɿ	ib^{z}ɿ
啞	i:sa	^{z}ɿ:sa	^{z}ɿ:ʃa
肝	tsɿmu	k^{s}ɿmu	tsɿmu

月	tsɿtsɿ	tsɿk^{s}ɿ	tsɿtsɿ
釘	ʈdzɿ	ʈg^{z}ɿ	ʈdzɿ
地面	dzɿː	tsɿː	tsɿː
鎌	^{z}ɿzara	^{z}ɿzara	^{z}ɿzara
父	^{z}ɿza	^{z}ɿza	^{z}ɿza
虱	ʂsaɴ	ʂsaɱ	ʂsaɱ
白	ʂsu	ʂsu	ʂsu

また、池間島方言は、他の宮古諸方言にみられる成節的な子音〔ɱ〕と〔ɲ〕の対立がなくなっていて、はねる音（撥音）／ɴ／に統一しているようである。

【表15】	神	蟹	土
平良市池間	kaɴ	kaɴ	nta
平良市西里	kaɱ	kaɲ	ɱta
城辺町保良	kaɱ	kaɲ	ɱta
平良市大神	kaɱ	kaɲ	ɱta
伊良部町長浜	kaɱ	kaɲ	ɱta

また、成節的な子音／v／も／u／に変化している。

〔kiuʂ〕煙　〔pau〕蛇　〔timpau〕虹

一方で、池間島方言には他の宮古諸方言にはみられない、二つの特殊な音声現象がみられる。ひとつは無声化した鼻音／ɱ／／ɲ／で、いまひとつは喉頭音化した子音〔k'〕〔t'〕である。

〔ɱmu〕雲、〔ɲna〕つな、〔ɲnu〕つの
〔^{k}k'unutsɿ〕九つ、〔^{k}k'utsɿgiː〕福木
〔't'umuti〕朝、〔't'iː〕煙管

無声化した鼻音は、つぎのように変化したとかんがえられる。

*kumo→ *ɸmu→ *ɸm̩u→m̩mu、

*tsuna→ *tsɿna→ *tsɿn̩a→n̩na

まず、語頭のつよい呼気によって第2音節目の鼻音が無声化し、つぎに逆行同化現象によって語頭の子音が鼻音化した結果ではないかとおもわれる。もしそうだとするならば、池間島方言にもつよい呼気をともなって発音される時代がかつてあったことになる。

また、喉頭音化した子音〔k'〕〔t'〕は、つぎのように生成されたとかんがえられる。

*kokonotsu→kʊk'unutsɿ→ ᵏk'unutsɿ

まず、語頭の音節の母音が無声音化し、語頭で呼気が浪費される。それに対抗して、第2音節目の無声の破裂音の調音に際して、喉頭での制御、すなわち、緊張とそれにともなう閉鎖がおこなわれる。すなわち、第2音節目の無声の破裂音が喉頭音化して呼気の浪費をふせぐのである。こうすることによって、呼気を語末まで保存することができるようになる。無声化した語頭の音節は、奄美沖縄方言群によくみられるように、よわまって脱落したとかんがえられる。

上記の単語にみられる喉頭音化した子音をフォネーム／k'／／t'／ととらえるか、促音のあとの単なる音声的なもので、弁別的でないととらえるかということなる見解がある。第1音節目の母音の無声化によって第2音節目の子音が喉頭音化する現象は奄美方言や沖縄本島北部方言では頻繁にみられるが、それとおなじ現象が池間島方言にもみられるのであり、第1音節目が脱落していく過程が一部の単語において進行しているのであろう。これとおなじ現象は、与那国方言や呼気のあまりつよくない八重山諸方言にもみられる。与那国島方言は、宮古八重山諸方言のなかで第1音節の脱落がもっともすすみ、喉頭音化した子音を発達させた方言といえるだろう。

（注）第1音節目が完全に脱落し、喉頭音化した子音がフォネームとして成立したとかんがえるのは平山輝男1983であり、第1音節目は、まだ完全には脱落せず、促音として残存していて、喉頭音化した子音は促音にともなう弁別的でない単なる音声現象とみなすのは名嘉真三成1984である。

3.6. 伊良部島方言

伊良部島は、宮古島の北西８キロメートルにあって、面積は２９平方キロメートルで、宮古諸島のなかでは宮古島についでおおきな島である。伊良部島の西隣にはせまい水路をはさんで下地島がならんでいる。この下地島に面した、いつつの集落、北から佐和田、長浜、国仲、伊良部、仲地があり、このいつつの集落の方言が伊良部島方言である。島の東側には、佐良浜とよばれる集落があるが、この集落は、池間島から移住してきた人々によってつくられていて、この佐良浜では池間島方言がはなされている。また、下地島はジェットパイロット訓練飛行場があって、住民のほとんどは空港に駐在する職員とその家族である。

伊良部島の伊良部、仲地、国仲のみっつの集落には、／ａｘａ／赤，／ｔａｘａ／高い、などの単語にみられる、無声の奥舌軟口蓋の摩擦音〔ｘ〕（標準語の／ｋ／に対応する）と、／ｋａ？ａｎ／鏡、／ａ？ａɹ／東、などの単語にみられる、喉頭破裂音／？／（標準語の／ｇ／に対応）がある。これはつよい呼気によって軟口蓋と奥舌での閉鎖がおしひらかれ、摩擦音化した結果、生じたものと思われる。いずれも前後にひろ母音／ａ／があるばあいに限定されていて、 phonematic な条件も重要である。軟口蓋破裂音／ｇ／の喉頭破裂音／？／への変化は、その変化の途中に有声の奥舌軟口蓋の摩擦音〔ɣ〕を経たものと思われる。

*ａｋａ→ａｘａ（赤）
*ｋａｇａｍｉ→ *ｋａɣａｍ→ｋａ？ａｎ（鏡）

この現象は、おなじ伊良部島の佐和田、長浜の方言にはみられないものである。このふたつの集落の方言は、伊良部、仲地、国仲の方言と比較したとき、相対的に呼気がよわい。これらの方言の〔ｐ〕は〔Φ〕にききまちがえられるような破裂のよわい lenis の破裂音である。また、これらの方言にはそり舌の側面音〔ɭ〕があることが呼気のよわさを裏づけている。このそり舌の側面摩擦音〔ɭ〕は *ｒｉ、あるいは、*ｒｕに対応してあらわれる成節的な子音である。伊良部、仲地の両方言でこれに対応するのは舌先母音〔ᶻɹ〕である。

【表16】	鳥	針	蒜（ニンニク）
佐和田方言	ｔｕɭ	ｐａɭ	ｐｉɭ

伊良部方言	tu^{z}ɿ	pa^{z}ɿ	pi^{z}ɿ
平良方言	tu^{z}ɿ	pa^{z}ɿ	pi^{z}ɿ

注）-aka→-axaとおなじ変化が宮古島北部の狩俣、大浦、島尻でもみられることが、崎山理1963で報告されている。そこにはつぎのような語例があがっている。

【表17】	大浦	島尻	狩俣
血	xa:tsɿ	axatsɿ	xa:tsɿ
中	na:	naxa	na:
東	a:ɿ	aɣaɿ	aɣaɿ

注）奄美方言でも似たような変化（〔k〕→〔h〕→〔'〕）がみられるが、おそらく、奄美方言における軟口蓋破裂音／k／の摩擦音化とその消失は、つよい呼気による「おしひらき」ではなく、呼気の「よわまり」に呼応した奥舌と軟口蓋の閉鎖の「ゆるみ」が原因ではないかと思われる。

3.7. 多良間方言の位置

多良間島と水納島は、宮古島からは約６０㎞、石垣島からは約４０㎞で、宮古島と石垣島の中間よりやや石垣島寄りにあるが、行政的には宮古郡に属している。多良間島は、面積１９.７平方キロメートル、人口約１５００人の島で、水納島は、面積２平方キロメートル、２世帯１０人弱の小さな島である。水納島から宮古島の高野集落に多くの人々が移住した。

多良間島の方言は、これまでおおくの研究者によって宮古諸方言の下位方言として位置づけられてきた。しかし、以下にのべるような、形容詞の語形変化のしかた、名詞の曲用のしかたなどにおいて、宮古諸方言よりも八重山諸方言との共通の特徴を多くもっている。多良間島方言が宮古諸方言と共通にもつ特徴のうち多くのものが宮古八重山方言群全体に共通するものである。よりふるい特徴、すなわち、系統的な関係を重視するならば、多良間島方言は八重山諸方言の下位方言として位置づけられるべきであろう。

宮古諸方言の形容詞は連用形「高く」に「有り」が融合してできているのに対して、八重山諸方言、与那国方言の形容詞は「高さ」に「有り」が融合してできていて、沖縄方言と同じである。与那国方言の形容詞は複雑に変化していて、わかりにくくなっているが、八重山諸方言と同様に「高さ＋有り」であろう。

【表18】	強い	高い	甘い
平良市西里	tsu：kaɹ	takakaɹ	amakaɹ
平良市池間	tʃu：kai	takakai	adzɹmakai
城辺町保良	tsu：kaɹ	takakaɹ	adzɹmakaɹ
多良間村塩川	tsu：ʃa：ɺ	takaʃa：ɺ	amaʃa：ɺ
石垣市石垣	tsu：sa：N	takasa：N	amasa：N
竹富町小浜	tsu：ha：N	takaha：N	ma：ha：N
竹富町黒島	su：saN	takahaN	amahaN
竹富町波照間	su：sa：haN	takahaN	amaha：N
与那国町祖納	susaN	t'agaN	amaN

宮古諸方言において、名詞に接続する格助辞 -juと、とりたて助辞 -jaは、名詞の末尾のフォネームのちがいに応じてちがった融合のしかたをする。なが母音に接続するときには、本来の形 -ju、 -jaがあらわれるが、みじか母音／i／に接続するときには、末尾の音節と融合し、口蓋音化した音節（拗音節）があらわれる。また、みじか母音／a／に格助辞 -juが接続するときは、なが母音／o：／になり、とりたて助辞 -jaが接続するときは、なが母音／a：／になる。舌先母音／ɹ／に接続するときには／j／が摩擦音〔z〕〔s〕に変化する。

【表19】	はだか格	格助辞 -ju	とりたて助辞 -ja
目	mi：	mi：ju	mi：ja
豆	mami	mamju：	mamja：
花	pana	pano：	pana：
婿	muku	muku：	muko：
鳥	tuɹ	tuɹzu	tuɹza
先	sakɹ	sakɹsu	sakɹsa
釘	fgɹ	fgɹzu	fgɹza

（用例は平良市西里）

それに対して、多良間島方言においては、舌先母音／ɿ／と融合して石垣方言のように前舌半せま母音／ε：／があらわれる。

多良間村塩川	ｓａｋɿ（先）	ｓａｋε：（先は）
石垣市石垣	ｓａｋɿ（先）	ｓａｋε：（先は）
竹富町波照間	ｓａｋɿ（先）	ｓａｋɚ：（先は）

また、前舌せま母音／ｉ／が末尾にくる名詞のばあいも、前舌半せま母音／ｅ：／があらわれ、口蓋音化した子音フォネームとなが母音／ａ：／があらわれる宮古諸方言とはことなり、多良間島方言は八重山諸方言とおなじである。

平良市西里	ｍａｍｉ（豆）	ｍａmjａ：	（豆は）
多良間村塩川	ｍａｍｉ（豆）	ｍａｍｅ：	（豆は）
石垣市石垣	ｍａｍｉ（豆）	ｍａｍｅ：	（豆は）

平良市西里	ｓａｋｉ（酒）	ｓａkjａ：	（酒は）
多良間村塩川	ｓａｋｉ（酒）	ｓａｋｅ：	（酒は）
石垣市石垣	ｓａｋｉ（酒）	ｓａｋｅ：	（酒は）

注）宮古諸方言、八重山諸方言ともに形容詞には、存在をあらわす動詞「有り」に相当する形が融合しているが、宮古諸方言の形容詞がいわゆる「連用形」に相当する形（〔-ɿ〕〔-ｉ〕）でおわっているのに対して、八重山諸方言は〔-ɴ〕でおわっていて、多良間方言はその点で宮古諸方言のようにもみられるが、宮古諸方言のばあい、ある種のモーダルな意味（話し手のつよいい意志をあらわすなど）を表現するときには、〔ｔａｋａｋａm̩〕〔ａｍａｋａm̩〕のように、語末に〔-m̩〕があらわれる。この語末にあらわれる〔-m̩〕の起源についてはまだ不明な点があるが、いずれにせよ、八重山諸方言の語末の〔-ɴ〕に通ずるものであることはまちがいない。